

③ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ニュースサイトの記事は誤字、脱字が目につきます。その数は、校関係の手が入る新聞記事の数百倍にはなるでしょう。しかし、読者から指摘がすぐなされて、いつのまにか誤字、脱字は修正されています。ニュースサイトの記者は誤字、脱字をさほど気にしていません。すぐに修正できるからです。というより、筆者が備えていなければならない文章の能力を、読者に委託しているふしがあります。つまり、記事もみんなできるといふわけです。それを突き詰めていくと、^A読者が記者であるというネット的な新しいタイプの「新聞」に行きつきます。

書きことはがネットに移動することでしだいには明らかになってきたことは、プロフェッショナルな書き手が不必要になりつつあるという現実です。書く力や文への責任などよりも、テーマや企画、つまりネタをいち早くネットことばにできるかが重要なのです。

一見すると、ネットを流れる文章は紙の書きことばと変わらないように見えます。しかし、実際に読んでみると、SNSを流れていることばの多くは会話調で書かれています。これはネット言語のもつ特性、双方向性（会話）が必然的に語り口を会話的にするためでしょう。

さらにネットの文章には作成のスピード感も求められます。まえにエッセイが教科書に掲載されるまで二年近くかかったという話をしましたが、そもそも書きことばというのは、そのように緩やかで、落ちついた時間のなかでつくられ、やりとりされるものでした。たとえば東京から札幌へ手紙を送るとき、投函してから相手に届くまで二日ほどかかります。しかしネットでは伝達時間がかぎりなくゼロに近く、あつという間に届きます。

ネットの高速性は、メッセージを書く時間も縮める傾向にあります。たとえば東京から札幌へ送る手紙を書くのに一時間かけたとします。これがメールだとどうなるでしょうか。一時間かけてメールを打つということはないでしょう。マウスをワンクリックするだけで届くメールに、手紙を書くような時間を費やすことはほとんどありません。

若い世代は手紙をだしたという経験自体が少ないかもしれませんが、それでも電子メールと手紙の違いくらいは理解できると思います。まず何よりメールはメッセージの文量がまるで異なります。時候の挨拶から始まる手紙は便せん一枚では失礼になるとして長い文の体裁を保てていましたが、メールでは全体がたったのひと言ということも。短文化はネットことばの大きな傾向の一つです。

また、メールの返信はできるだけ早いほうがいい、というのが一般的なルールになっています。これはメールが書きことばの交換ではなく、ひとつの「会話」として考えられているからでしょう。つまり^B「間」が意味をもつのです。「間」が問われるということは、メッセージの内容がまず問われる書きことばとは異なった話しことばに近い性質が、電子メールに存在するということがいえます。

ネットはことばを流通させる時間を限りなくゼロに近づけたがゆえに、速度に過剰に神経を尖らせるメディアになりました。^X株の売買はかつて音声言語で行っていましたが、いまではネットを介したデジタルな言語で取引を行っています。その注文処理速度は東証で一〇〇〇分の一秒以下です。しかしこれでもニューヨーク、シンガポールの一〇〇万分の一秒以下とくらべると遅い。とにかく「遅い」ことはマイナスではない。

スピードを優先するがゆえに、ネットことばの内容は劣化していく。これは宿命のようなものです。新聞、本などの紙のことばより、放送のことばにはミスが多いように感じます。放送がスピードとライブ感を重視するメディアだからです。さらにネットのことばは、放送とおなじようなスピードとともに、膨大な情報量をもっています。そのため内容そのものの推敲、検証などはないがしろにならざるをえない。

さらに短縮変換機能を多用することで、文章表現が似通ったものになっていきます。これも文章作成の速度を重視するために起こることです。キーを速く打って文をつくり、早く届ける。メッセージの内容よりも、ことばをやりとりしているという「事実」が重要なわけです。

^C ネットを流れることばは「スピードをかぎりなく愛する」病をわずらった言語なのです。

ネット上の文字は、音、画像、映像との競争を強いられています。いうまでもなく、音（音声）や動画が記録でき、簡単に送ることができるようになったからです。

よくが書きことばの魅力について話をするときに、よく使う例があります。それは折り鶴を折るやり方なのですが、もつとも簡単に分かりやすく説明するにはナレーション付きの動画が一番です。つぎに分かりやすいのは、イラストや画像に書きことばや話しことばを加えたものです。

^Y これを書きことばだけで説明するとなると、とたんに筆が止まってしまいます。折り鶴を折るための第一段階は色紙をふたつに折って三角形をつくるのですが、

「まず色紙をふたつ折りにする」

と書いて正しいのかというと、そうではありません。これを読んで自分で解釈してつくったのが三角形だった人もいれば、長方形になった人もいます。では正しく三角形になるように文字だけでどう説明するのか？

書きことばというのは、非常にやっかいなものなのです。このやっかいさがじつは人間に新しい個の想像力を生みだし、社会が必然的にもつ人を統制しコントロールしようという力から解放する精神的、知的な手だてを与えるのですが、それはこの章の最後に述べます。

ともかく今では、文章だけで折り鶴のつくり方を説明しようなどと考える人はいないし、それを読んで折ってみようという人もいない。この事実がネット時代のことばの状況を暗示しています。ネットを流れる文字は今よりも少なくなつて、音声、画像、動画の割合が多くなつてくるはずですが、

では^D文章を読んで折り鶴をつくった場合と、動画を見てやった場合とは、どちらが感情に訴えかけるのでしょうか？ ぼくは動画を見ながら折るよりも、文章を読んで折るほうを選びます。なぜなら、人がやって「見せた」ものを真似るよりも、文章を読んでやるほうがずっと達成感があると思うからです。同時に記憶にも残りやすいはず。形になっていないものを、読むことによつて生まれる自己の想像力を使って、形にするのですから。

書きことばが衰退するということは、読む力も衰退するということです。よつて読者の力も同時に衰えていきます。現在、紙に書かれる文章も短文化が進んでいます。短文化しか読まない読み手がふえているからにはかなりません。長文を読めない人がふえているのです。

ネット上では「長々と書いて説明しなければならないのは、そもそもダメなアイデア」と見なされます。

- (注1) 「東証」……東京都中央区日本橋にある、日本最大の証券取引所である東京証券取引所のこと。
(藤原智美「つながらない勇氣 ネット断食3日間のススメ」による)
- (注2) 「推敲」……文章や詩の字句をあれこれと練り考えること。

問1 本文中にある

X	・	Y
---	---	---

 に当てはまる言葉を次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① あるいは ② なぜなら ③ さらに ④ つまり ⑤ たとえば ⑥ しかし

問2 ——線部A「読者が記者であるというネット的な新しいタイプの『新聞』」とありますが、それはどのような「新聞」ですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ① 読者が、プロフェSSIONナルな書き手である記者を指定することにより、誤字・脱字がなくなるような「新聞」。
- ② 読者が、記者に必要な文章の能力をゆだねられ、校閲係として誤字・脱字を修正しつつみんなで作るような「新聞」。
- ③ 記事を書いた記者ではなく、記事を読む読者のほうが記事に対しての最終的な責任を負うような「新聞」。
- ④ 記者の書いた記事に対して、読者がその内容を自由に与えて変更することのできるような「新聞」。

問3 ——線部B「『間』が意味をもつのです」とありますが、それはなぜですか。その理由について説明した次の記述の

I	・	II
---	---	----

 に当てはまる言葉を本文中から抜き出して埋め、説明を完成させなさい。なお、空欄内の数字は字数を表しています。(句読点や記号は一字とします。)

メールは

I

 五字 の交換とは異なり、

II

 八字 と同じようにとらえられているから。

問4 ——線部C「ネットを流れることばは『スピードをかぎりなく愛する』病をわずらった言語なのです」とありますが、『スピードをかぎりなく愛する』病」とは、どのようなことですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ① どのような内容のことばであっても、何回かことばをやりとりするという「事実」だけが重要視され、内容がおろそかになること。
- ② ネットことばが、その特性である双方向性を重要視され、会話調で読み書きされるようになり、ただのおしゃべりになること。
- ③ スピードの速さを何よりも第一に考えるために、膨大な量の情報を推敲することや、文章表現を考えることが軽視されてしまうこと。
- ④ プロフェSSIONナルな書き手でなくても誰でも簡単に書けるので、題材がテーマや企画、つまり、読者が単に喜ぶようなネタになること。

問5 ——線部D「文章を読んで折り鶴をつくった場合と、動画を見てやった場合とでは、どちらが感情に訴えかけるでしょうか？」とありますが、筆者は、どちらの場合が「感情に訴えかける」と思っていますか。本文中の言葉を使い、その理由も含めて、六〇字以上、七〇字以内で説明しなさい。(句読点や記号は一字とします。)

問6 この文章の内容と合っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 東京から札幌へ手紙を送ると相手に届くまで二日ほどかかるが、ネットのメールはその半分ほどの短い伝達時間で届く。
- ② ネットで行われる株の売買の注文処理速度は、東証で一〇〇分の一秒以下であり、ニューヨークやシンガポールとほぼ同じ速度である。
- ③ 折り鶴の折り方を説明する場合は、イラストや画像に書きことばや話しことばを加える方法がもっとも分かりやすく伝わる。
- ④ 書きことばが短くなって衰退してしまうと、短文しか読むことがない人がふえ、長文を読むための読解力のない人がふえていく。

4 次は、八束澄子『ぼくたちはまだ出逢っていない』の一節である。中学二年生の美雨は、骨董屋「骨董 梶木」に飾られている茶碗を一目見て気に入り、たびたび外から店の様子をうかがっていた。次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

骨董屋通いに、余念がない美雨に、ある日、突然チャンスがめぐってきた。

「お嬢ちゃん」

中から格子戸があげられ、初老の男性に声をかけられた。

「毎日きてるみたいやけど、その茶碗、そないに気に入ったんか？」

「骨董 梶木」の店主だった。

「あんたは、なかなか筋がええ。この茶碗に目をつけるやなんて、モノを見る眼がある」

店に招き入れられ、小上がりの座敷に腰かけてお茶をふるまってもらい、その上ほめまくられて、美雨は身の置きどころがなかった。「いえ」とか、「そんな」とか、「ただ、なんか気になつて」とあいまいな返事をくりかえしながら、座布団の上でおしりをもぞもぞさせた。

今、美雨の目の前の畳の上には、^A例の茶碗がある。

もどが話好きなのか暇なのか、店主は茶碗の名前（銘というらしい）から由来まで、ひとりで三十分近くしゃべり続けた。千利休とか豊臣秀吉とか、ときどききいたことのある名前が混ざる以外ちんぷんかんぷんだったけれど、どうやらこの茶碗はすごいものであるということだけはわかった。だいたい茶碗に名前があることに一番びっくりした。

「月光」……

「ここに金で直しが入つてるやろ？ 目に見えへんか？ それがこの茶碗の値打ちや。昔は電気もないし夜が長いやろ、そやから昔の人は空をながめる時間が長かつたんやろな。欠けた月がまた日に日にまるうなつていく様子を見て、ロマンを感じたんや」

B 美雨はため息をもらした。

家にも学校にも居場所を見つけたことができずにいた自分を、「月光」はその強烈な吸引力で呼び寄せてくれたのかもしれない。

——これって、運命？

「あの、またきてもいいですか」

気がついたら、たずねていた。

ほんの数分で通り雨は上がり、日が射しはじめていた。格子戸から射しこんだ光が、畳に置かれた「月光」にあたり、その一瞬、月が光をまとった。

「ああ、ええよ。いつでもおいで」

店主の声はやわらかく、包みこむようなやさしさに満ちていた。

「ありがとうございます！」

美雨の心に C 飛び上がるほどのよろこびがわき上がった。こんな気持ち、いつ以来だろう。すっかり忘れてた。

次の土曜日、ふたたび「骨董 梶木」を訪れた。

朝からめくちや暑い日で、ほんの数十分歩いただけで汗だくになった。背中といわず首筋といわず、体中の毛穴という毛穴から汗がふき出し、はいているサンダルまで汗でつるつるすべった。汗腺って足の裏まであるんだと大発見した気がした。

タオルハンカチで額の汗をぬぐいながら、
「こんにちは」
と格子戸を引くと、めずらしいことに来客がいた。しまったと腰を引いたとたん、

「おお。ちようどええとこにきた」
b 喜色満面の店主に手招きされた。

月にロマン。あたしといっしょだ。あたしもいつも月になぐさめてもらってる。

「月の満ち欠けは命の不思議そのものや。そやから人びとは畏敬の念を抱いて月に祈りを捧げた。万葉集でも月を歌うたもんがいっぱいあるやろ」

そういわれてもひとつも思い浮かばないのが恥ずかしかったけれど、脳裏に百人一首の十二単の着物を着た女性の姿が浮かんで消えた。

「この茶碗は、昔の職人がただ欠けを直すだけやとつまらん思ったんか、繕ったおりに縁に金の月をのせたんやな。それがすばらしいと代々の茶人たちが珍重して、大切に大切に受け継いだわけや。それを思うと、壊れたら終わりの使い捨ての今が恥ずかしい思わんか。壊れたものに、ふたたび命をふきこむ。これこそが昔から受け継がれてきた日本独特の文化や」

——壊れたものに、ふたたび命をふきこむ。

店主の言葉に急に激しく降り出した雨の音が重なった。むっとした雨のにおいが格子戸のすきまから狭い店内に流れこんでくる。

——壊れても終わりじゃないんだ。

ザーッ。声をかき消すような雨音に、
「すごい雨やなあ」

と店主はいったん口をつぐんで、茶をすすった。

物思いにふけりながら、美雨はもう一度じっくりと「月光」を見つめた。ガラス越しではなく間近で見るとその姿は、思っていた以上に凛々しく、また誇り高かった。触るのが怖いくらいに。雨音にまぎれてそっと

「あんな二筋むこうの角に和菓子屋があるやろ？ そこ行つて、水無月五つ買ってきてんか」
「みなづき？」

「なんや知らんのかいな。お菓子の名前や。お茶いれて待ってるし、すぐ行つてきて。五つやで」
と千円札を一枚渡された。とまどいつつ、ふたたび強い日差しが照りつける通りに出た。そういえばそんな店があったような気がする。

和菓子屋はすぐにわかった。通りに面した店先に、「水無月」と書かれた看板が出ていた。

——ああ、こんな字？

そういえば以前国語の授業で習った。「水無月」って、確か「六月」のことだ。

「水無月、五つください」

告げるとすぐに店員が、白い三角形の外郎のようなものの上にあずきののったお菓子を透明パックにつめてくれた。

「おう、暑い中、ご苦労さん」

汗でぬれたつり銭といっしょに菓子のパックを渡すと、店主は水屋から黒い漆塗りの菓子皿を取り出した。その上に水無月をのせると、黒光りする肌に水無月の白がとてもよく映えた。思わず声に出た。

「きれい」

「そやろ。黒漆によく映るやろ。水無月は京都の夏のお菓子の代表格や」
さ、さ、どうぞと客にすすめながら、

「あんたもお食べ」

と美雨の前にもお茶といっしょに並べてくれた。

「かわいいお嬢さんどすなあ。お孫さんですか？」

客にきかれ、びっくりした。どうこたえるだろうと店主の顔をうかが

うと、
「弟子ですわ」

さらりといつて、かかかと笑った。で、弟子つてと、c あつけに取られていると、

「それは冗談ですけどな、この子、なかなかモノを見る眼があるんですわ」

と美雨をふりかえって目を細めた。

「そうでつか。それはそれは。お若いのに楽しみですな」

客は鷹揚に笑いながら、楊枝で菓子を切つて口に運んだ。美雨も真似をして、ひとくち食べてみた。

——おいしい！

つるりとした冷たい食感が舌に心地いい。そのあと、じわーとあずきのあまみがしみてくる。はじめて食べた水無月のおいしさに美雨は感動した。

お茶のあと、高さほんの十センチほどの黒くすすけた仏像の前に、店主と客は長談義をはじめた。じやまにならないよう近くの椅子に腰かけて、おとなしくきくともなくきいていた。

「ええですなあ、この毘沙門さん」

「そうでつしやる？ 安土桃山時代の作いわれてますけどな、真偽のほどはようわかりません」

「小ぶりやのに、なんともいえん風格があつて……」

よほど気に入っているのだろう、客は吸いこまれるように仏像に顔を近づけたと思うと、店主の許しを得て両手に包みこみ、「うーん」とうなつた。

「このあいだきたスイス人のお客さんも、ごつつう執着してはりましたわ」

「そうでつしやるなあ。……うむ」

よく切れる彫刻刀で一気呵成に彫り上げたようにも見えるその仏像の、どこがそんなにいいのか、美雨には理解不能だったけれど、どうしようもなく惹かれる気持ちはよくわかる。恋だ。この客はきつとこの木製の小さな仏像に恋をしたのだ。

そのうち、仏像を真ん中に白髪頭をくつつけてああたこうだとおしやべりする老人ふたりが、まるでフィギュアのコレクションを自慢しあう中学生みたいに見えて親近感がわいた。

結局、客は梱包してもらった仏像を抱えて、小躍りするよう帰っていった。そのうしろ姿を、店主は D きびしさと安堵の入り混じったような複雑な表情で見送っていた。

「ま、ええ人に買うてもろて、よかったゆうことやるな」

最後は自分にいきかせるように、ひとりごとをつぶやいていた。その様子がかわいくて、ついクスリと笑ってしまった。

美雨にようやく気づいたのか、店主は、

「あ、まだおったんか。今日はご苦労さんやったな。ところで、まだ名前もきいてへんかったな」といった。

「つ、塚本美雨です」

新しい苗字に変わつて一年以上たつのに、まだ名乗るたびつかえてしまふ。

「美雨ちゃんか。どんな字書くんや」

「美しいに雨」

「雨？ ほう、めずらしいな」

「岡山の雨の多い町で生まれたから」

「ほうか。どうりで言葉が違ふ思うたわ。今日は助かったわ。ありがと

な。またきてや」

「はい。水無月おいしかったです。ごちそうさまでした」

「京都はおいしいお菓子がたんとあるしな。またごちそうするわな」

店主のやさしい言葉に送られて表に出た。

かげろうが立つほど強い日差しに照らされた路地のずつとむこうから、「コンコンチキチン」と祇園祭のお囃子を練習する音が風にのって響いてきた。

(注1)「格子戸」……和風の建物によく使われる、木材を縦横に組んで格子状にした戸。

(注2)「小上がり」……部屋の一画を一段高くして、畳を敷いて座れるようにした空間。

(注3)「千利休」……日本の茶人(一五二二～一五九二)。戦国時代から安土桃山にかけて活躍し、豊臣秀吉の側近として知られる。

(注4)「百人一首」……鎌倉時代初期に、藤原定家が選んだとされる和歌集。

(注5)「外郎」……和菓子の一つ。

(注6)「水屋」……台所にある食器棚。

(注7)「毘沙門」……仏教における仏神で、四天王の一つ。

(注8)「フィギュア」……ここでは、人やキャラクターなどをかたどった模型のこと。

問1 —— 線部 a ～ c の本文中での意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 「余念がない」

- ① あこがれている ② やすらぎを得ている
③ 熱中している ④ 喜びを感じている

b 「喜色満面」

- ① 喜びいっぱいである様子 ② 笑わせようとしている様子
③ 良いことをしたい様子 ④ 大げさに明るくしている様子

c 「あつけに取られて」

- ① 嬉しく、感情が高ぶって ② 悲しく、涙が出そうで
③ 感動し、震えそうになって ④ 驚きあきれ、ぼうぜんとして

問2 ――線部A「例の茶碗」とは、「月光」という銘の茶碗のことですが、この「茶碗」とはどういうものですか。これについて説明した次の文のI IIIに当てはまる言葉を本文中から抜き出して埋め、説明を完成させなさい。なお、空欄内の数字は字数を表しています。（句読点や記号は一字とします。）

満ち欠けをする月に I 三字 を感じる日本人の血を受け継いでいたかつての職人が、 II 七字 だけでなく、縁に金の月をのせた茶碗であり、そのことにより、壊れたものに III 一〇字 という日本独特の文化が表されているものである。

問3 ――線部B「美雨はため息をもらした」とありますが、このとき美雨はどのような様子でいますか。それについて説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ① 店主から聞かされた「月光」のすばらしさに納得するとともに、自分はこの先「月光」のような名品をあつかえる骨董商になれらうと落胆している。
- ② 店主が話してくれた「月光」のすばらしさを実感するとともに、その「月光」をガラス越しではなく、間近で直接見られることの喜びに心かちたっている。
- ③ 店主が言う「月光」のすばらしがいま一つ理解できず、格子戸のすきまから狭い店内に流れこんでくる雨音に重なるようにして、店主への不満を態度で示している。
- ④ 店主が語った「月光」のすばらしさよりも、店主の話から脳裏に浮かんできた百人一首の十二単の着物を着た女性の美しさに対して心ひかれている。

問4 ――線部C「飛び上がるほどのよろこびがわき上がった」とありますが、それはなぜですか。七〇字以上、八〇字以内で説明しなさい。（句読点や記号は一字とします。）

問5 ――線部D「さびしさと安堵の入り混じったような複雑な表情」とありますが、このときの店主の様子は、どのようなものですか。これについて説明した次の文のI IIIに当てはまる言葉を本文中から抜き出して埋め、説明を完成させなさい。なお、空欄内の数字は字数を表しています。（句読点や記号は一字とします。）

自分でも I 七字 毘沙門の仏像が売れてしまい手放すことになったものの、まるで II 四字 かのよう毘沙門の仏像に惹かれている客に買ってもらってよかったと III 九字 様子。

問6 この文章の内容と合っているものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ① 美雨が毎日骨董屋に通っていて気に入った茶碗があるようだ気づいた骨董屋の店主は、「モノを見る眼がある」と声をかけ、美雨を店に招き入れ茶碗について話をした。
- ② 骨董屋の店主から「まだ名前もきいてへんかったな」と親しげに名前を尋ねられたことがきっかけで、美雨は店主の弟子として骨董の勉強をしたいと思うようになった。
- ③ 骨董屋の店主と客が「毘沙門」という仏像について話しているのを聞いた美雨は、初めはそのよさを理解できなかったが、次第に親近感がわき仏像に惹かれるようになった。
- ④ 骨董屋の店主から店の客に「弟子ですわ」と紹介された美雨は、弟子として認められていることがわかり、この先「月光」を自分のものにできるかもしれないと思った。
- ⑤ 骨董屋の店主に和菓子屋に行つて水無月を買つてきてほしいとたのまれた美雨は、「あんたもお食べ」と店主にすすめられはじめて水無月を食べ、そのおいしさに感動した。